

「子育て支援センター」での保育学生の学び：保育士・幼稚園教諭を目指す学生の記録に見られる視点の変化

著者	傳馬 淳一郎
雑誌名	社会保育実践研究
号	1
ページ	55-62
発行年	2017-03-24
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001675/

「子育て支援センター」での保育学生の学び

～保育士・幼稚園教諭を目指す学生の記録に見られる視点の変化～

傳馬淳一郎*

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)

キーワード：子育て支援、保育学生、フィールドワーク

1. はじめに

近年、子育てを取り巻く環境は、大きく変化してきた。産業構造の変化により都市化が進み、地域のつながりは希薄になってきた。また、核家族化の進行は、それまで多世代の目や手が子どもに注がれる機会が失われ、子育ての責任は家庭の中、特に母親の手に委ねられ孤立した子育ての中で育児不安に陥り、虐待に至ってしまうケースも増えてきている。こうした背景の中、個人的営みとされてきた「子育て」を社会全体で支えようと「子育て支援」が展開され、その担い手の一つとして保育者（保育士・幼稚園教諭）の役割が期待されている。

2008 年に告示された保育所保育指針では、保育所の役割として「保育に関する専門性を有する職員」（総則 2(2)）が「入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源の連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援を行う役割を担う」と記されている。また、幼稚園教育要領では「幼児の生活は、家庭を基盤」としながらも幼稚園が「家庭と連携を十分に図る」（第 3 章 第 1-1(8)）ことを記している。さらに「幼稚園の運営に当たっては、子育て支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、(略) 地域における幼児期のセンターとしての役割を果たすように努める」（第 3 章 第 2-2）と幼稚園にも子育て支援の役割を求めている。つまり、子育て支援は保育者の専門性の一つであり、園に通う保護者のみならず地域の子育て家庭を対象として支援していくことを職務として期待されているといえる。

保育士・幼稚園教諭の養成課程の中では、対象となる子どもや保護者に直接関わる機会として実習があげられる。しかし実態として、実習という限られた期間の中では、子どもへの保育が中心となり、実習生が保護者に関わる機会はほとんどない。それを補完するものとして養成校が独自に子育て支援実践に取り組み、徐々に広がりを見せている。その一方で、そうした実践が保育学生の子育て支援力の育成に充分結び付いていないとの指摘がある。橘・小原（2014）は、現職保育者への調査から養成段階で、学生と保護者との直接的な関わりを持つ機会が少ないこと、子育て支援を行っている場合でも「単位化されていないことが多く、自主的な課外活動として子育て支援活動が位置づけられている場合が多い」ことを明らかにしている。また、福井・小栗・瀧川（2008）の保育者養成校への調査では、短期大学で展開される子育て支援は「音楽や劇、ペープサート、パネルシアターなどを演じる、いわゆるショー的な要素を持つ活動、製作活動や絵画遊びのような、主に子どもが参加する活動」が多いことを明らかにしている。

確かに子どもが対象となる保育実践は、実習や現場に出てから役立つ経験であり、学生にとって学びも多

* 責任著者
傳馬淳一郎 den.jun@nayoro.ac.jp

い。しかし、「子育て支援力」（福井ら 2008）の育成を目指すのであれば、支援の対象は子どもに留まらず保護者、地域、社会へと視点が広がるような養成が必要ではないだろうか。

2. 目的

本稿では、本学短期大学2年次の保育学生が行った「子育て支援センター」でのフィールドワーク実践を報告する。実践の中で変化する保育学生の学びに着目して、養成段階における「子育て支援」実践の在り方について検討を試みる。また、本学は短期大学募集停止後、2016年度より4年制の保育者養成大学「社会保育学科」としてスタートした。社会保育学科2年次（1期生は2017年度）に設けている独自科目「家庭支援実践演習」での授業展開に向けて、課題の整理を試みる。

3. 方法

ゼミナール形式で行われる総合演習の時間を利用して、市内地域子育て支援センターにフィールドワークを行った。訪問ごとに記録した学生の振り返り、ゼミ最終課題としてまとめたレポートの記述内容から、学生が得た経験や気づきを整理し、フィールドワークにおける学生の視点の変化を探る。

なお、「子育て支援」に関連する科目として家庭支援論（短期大学2年前期）、相談援助（短期大学2年前期）、保育相談支援（短期大学2年後期）を全員受講している。

4. 子育て支援センターでのフィールドワーク実践

1) フィールドワークの概要

2年次前期、名寄市内の子育て支援センター「ひまわりらんど」の協力のもと、1回につき3時間程度、計3回のフィールドワークを行った。子育て支援センターの活動に合わせて、学生は自由に親子に接した。訪問記録用紙（図1）には、訪問前に「目標」を立て、訪問後には各自振り返りを記入、翌週のゼミの時間に振り返りと討議を行っている。学生の学びや視点の変化を探るため、振り返りシートには、「目標」「記録（子どもの様子、保護者の様子、保育者の援助、流れ・雰囲気など）」「感想・今後に向けて」の大枠のみを示し、学生には書式にこだわらず自由に記述するよう指示した。

2年次前期

訪問先：名寄市地域子育て支援センター ひまわりらんど

訪問日：2016年5月25日、7月6日、7月20日 計3回

内容：午後から3時間程度、自由に親子と関わる

目標の設定 → フィールドワーク → 訪問記録 → グループディスカッション

夏季休業を利用して、市外の子育て支援センター3カ所を訪問した。それぞれのセンターでは半日程度、保育者と同じように訪問する親子に接した。

2年次夏季休業

訪問先：士別市子育て支援センター ゆら

訪問日：2016年9月12日

内容：午前 保育士より講話、施設見学、親子との関わり

訪問先：芽室町役場子育て支援センター げんき

訪問日：2016年9月13日

内容：午前 施設見学、親子との関わり、保育士との振り返り
午後 芽室町10ヶ月検診の見学、保健師等との連携の様子を観察

訪問先：帯広市地域子育て支援センター あじさい

訪問日：2016年9月14日

内容：午前 園長講話、施設見学、親子との関わり、併設保育所見学

その他のゼミ活動として、以下の子育て支援関連のイベントに補助的（手遊びやふれあい遊びの披露、託児など）に参加している。

名寄市地域子育て支援センター ひまわりらんど

8月10日 10:00~11:30 「でんでんと一緒に遊ぼう！マジックショー他」

手遊び・ふれあい遊び・託児補助

10月25日・27日 10:00~11:00 親子講座「子育て座談会」

手遊び・託児補助

西興部村子育て支援教室「キッズサロン」

11月15日 10:00~12:00 「子育てミニ講座」

手遊び・託児補助

2）フィールドワークでの学生の変化（訪問記録より）

表（1）～（5）は、学生の訪問記録に記入された内容を「目標」と参与観察の対象となる「子ども」「保護者」「保育者」、学生自身の「学び、気づき等」に分けて要約したものである。また、夏季休業に行った市外のフィールドワークを実施後、活動を振り返り、2月に作成した最終レポート「1年間の振り返り」を最後に記した。

フィールドワークに参加したのは、筆者のゼミ学生8名であった。そのうち3名は、就職活動などで全てのフィールドワークに参加できなかった。本報告では、継続的な訪問による変化を探るため、全てのフィールドワーク（市内3回、市外3か所）に参加して記録を残している5名を対象とした。

訪問場所	年	月	日
訪問日			
記録者			
本日の目標			
記録（子どもの様子、保護者の様子、保育者の援助、流れ・雰囲気など）			
※パソコンに記入			
感想・今後に向けて			

図1 フィールドワーク記録用紙

表1 学生Aの記録

	1回目	2回目	3回目	最終振り返り
目標		「子どもと関わるためにも親御さんに話しかける」	「保護者の方にたくさん質問をする」	
子ども	・子どもにつきっきりの親の所へ行き子どもに話しかけたり、あやしたりしてもいづらい感じがした			
保護者		・親同士が「〇ヶ月頃ってどれくらいの体重でしたか」と聞いていることがあった	・名札の子どもの月齢を見て「歳近いね。よろしくね」と話している母親同士の会話が見られた	
保育者	・保育者が援助しているところを見ることが出来なかった			・保健師が訪問するなど他の専門職とつなぐ役割
学び 気づき等	・(次回) 子どもから話しかけるのではなく、親に話しかけるところからはじめてみる	・親に話かけると子どもとも関わりやすくなったと感じた	・親同士が子どもの成長を共有して、育児不安も減っているのではないかな	・子どもに話しかける前に保護者へ話しかけると自然と子どもに関われると感じた

表2 学生Bの記録

	1回目	2回目	3回目	最終振り返り
目標	「子どもの様子・保護者の様子を観察する」	「保護者から話を聞けるよう積極的に声をかけていく」	「保育者の親子との関わりを観察する」	
子ども	・幅広い年齢の子どもが来ていた ・中心は子どもとの関わりだった			
保護者		・子どもの様子について相談し合っていた ・親同士の会話に入り、家での様子、支援センターの利用について話を聞いた		・実習では関わりの少ない保護者との関わり方を学んだ
保育者	・親子で遊んでいる所に保育者がどのように入っていくのか		・製作があったので来場者が多かった ・イベントの日だけに来る親子もいた	・保護者と信頼関係を築くことの大切さや、関係を築いていくことの難しさを実感
学び 気づき等	・子どもとの関わりが中心で、保護者と会話するには回を重ねる必要を感じた		・完成させることが目的となるようなイベントは本当に必要なのだろうか	・保育所等で勤めれば、保護者との関わりが大切になってくる。

表3 学生Cの記録

	1回目	2回目	3回目	最終振り返り
目標	「親子の様子を観察して関わる」	「保育者と保護者との関わりに目を向ける」	「保育士の動きに目を向ける。親子と交流をもつ」	
子ども	・乳児との触れ合いがコミュニケーションになると学んだことを実践	・人見知りをする子はいなかったが、恥ずかしがって普段のようには話せない子がいた		
保護者	・自分の子ども以外の子ともとも触れ合っている	・保護者同士で交流が多く、子どもは学生や保育者と遊ぶ	・ポツンと一人での保護者	・常に子どもと一緒にいる保護者にとって、他愛のない会話であっても、話を聞いてもらえる存在は大きい
保育者	・保育者の援助まで見ることが出来なかった	・保育者と保護者の積極的な関わりはないと感じた		・相談内容は、育児に関する こと、園選び、地域の情報など様々 ・保護者同士をつなげる
学び 気づき等	・積極的に話しかけ何となくでも覚えてもらうことも大切。		・一人での保護者へ話しかけに行く「顔がパアッとした」 ・製作活動も良いが、目的は保護者同士をつなぐもの	・実習では関わる機会のない保護者に初めは緊張したが、学生であっても話を聞くことで小さな支援になったのでは…

表4 学生Dの記録

	1回目	2回目	3回目	最終振り返り
目標	「子どもたちの様子や保護者の様子をみて、触れ合う」	「子どものことで質問や声をかけて、母親と会話する」	「乳児の様子、母親の子育て、声かけを知る」	
子ども		・1～2歳児が多く、母親の見守っているところで遊ぼうとしている		
保護者	・保護者の方とあまり話をする ことができなかった	・今回は、お母さん方から話しかけてもらうこともあった		・母親の孤立感や育児不安を和らげている
保育者	・保育者の援助まで見ることが できなかった		・人見知りをして泣く子の親に、子どもが成長していることを伝えていた。	・親子を温かく迎え入れ、保護者にとって安らぎの場となるような環境づくりを心がけている ・母親同士をつなげ、様々な機関につなげる役割をもっている
学び 気づき等		・センターをよく利用する母親との会話から、引っ越してきたばかりだからこそ利用しているのだろうと感じた		・実習では経験することのない保護者とのコミュニケーションは、初めうまくいかなかった。回を重ねるごとに自然と声かけができるようになっていた ・保育者として働くようになって、この経験は役立つと思う

表5 学生Eの記録

	1回目	2回目	3回目	最終振り返り
目標	「子どもの様子を見る」	「親子の様子」	「保育者の役割をみる」	
子ども	・異なる年齢の子ども同士でも遊んでいる	・たくさんの知らない大人がいたため人見知りする子がいた		
保護者	・親同士で話をしている	・行事がなかったので人数が少なかった	・まだ保護者の方と話すことができないので、日常会話から話をできるようにになりたい	・子どものことについて質問をすると教えてくれる母親がいた
保育者			・子どもの成長について話をしていた ・保育者と保護者が話している姿は多くない	
学び 気づき等		・人数が少ないことで話したことのない親同士が話す機会ができると思った		・保護者同士が出会える場であったり、息抜きの場になっている ・大人の方と話をすることができるようになった

5. 学生の学び

1) 子どもを入口とする視点

学生たちは、ゼミでの事前学習や同時期に受講している関連科目（家庭支援論など）から地域子育て支援センターは親子を対象としている事業であることを理解している。そのため、1回目の目標として「親子」へのかかわりを掲げている（学生B・C・D）。しかし、初めて出会う保護者にどのように声をかけてよいかと戸惑いながら、子どもへの関わりが中心となっていることが見て取れる。確かに子どもとの関わりは、講義で得た乳幼児の知識を実践として試みる場として捉えることができる。学生Cは、「乳児との触れ合いがコミュニケーション」と講義で学んだことを実際に試みている。また学生Dは、母親を安全基地にして遊ぶ1～2歳児の姿を目の前にして母子の愛着を実感していた。短大2年次ということもあり、子育て支援センターへの訪問前後には保育所・幼稚園への実習が予定されている。そのため、子育て支援センターで子どもに接する経験は、実習に向けての模擬保育の意味合いを持つといえる。

2) 保護者への支援と関係づくり

一方で学生自身は、保護者とのコミュニケーションには時間をかけて関係性を築く必要性を感じている。学生Bは、1回目の学びとして「保護者と会話するには回を重ねる必要」を感じ、2回目の訪問時には保護者に積極的に話しかけていくことを目標としている。同じように学生Aは、子どもとより良く関わるために保護者に話しかけることを2回目の目標として、その日の振り返りの中で子どもとの良好な関係を記録している。また多くの学生が、保護者との距離を縮めて保護者同士で交わしている会話に耳を傾けるなかで、子育て中の保護者が求めているものを感じ始めている。保護者同士で子どもの発達や家での様子を共有している姿を見聞きして（学生A、B、C）、センターが子育てに息詰まる保護者の一息つける場所になり（学生C、E）、母親の孤立感や育児不安を和らげている（学生D）ことを感じている。

3) 子育て支援における保育者の役割

フィールドワークの回を重ね、子育て支援センターがどのように利用されているかを俯瞰的に見るようになってきた学生たちは、そこでの環境構成や保育者の役割に関心が向けられるようになっている。

例えば製作などの行事があることで親子が子育て支援センターへと足を運ぶきっかけになるとイベントの必要性を感じる一方、製作物の完成が主な目的となることで親子にとって居心地の良い場所にならないのではとの疑問を感じる。

写真2は、ゼミ活動の総括の中で、学生が子育て支援にとって重要であると感じた場面の一つである。①保育士は、町で作成した「子育てガイド」を用いて母親が求める情報を伝えている。②その後、傍にいた保護者も会話に巻き込みながら3人での会話となる(③)。④数分後、保育士はその場から離れ、保育士が仲立ちした母親同士で会話を続けている。その後も保育士は、会場内の親子の様子を見渡ししながら子どもに声をかけ、保護者の状態を観察しながら必要な相談に応じていた。

この場面から学生は、子育て支援における保育者の役割として、単に子どもと遊んで保護者がホッと一息つけるだけではなく、保護者同士を「つなぐ」ことが保護者支援の一つのあり方として大切であると気づき始める。親の悩みを個別に解決するにとどまらず、親同士をつなぎ、必要な情報を提示しながら、今後の子育てに役立てるような支援をフィールドワークの中で学んでいる。

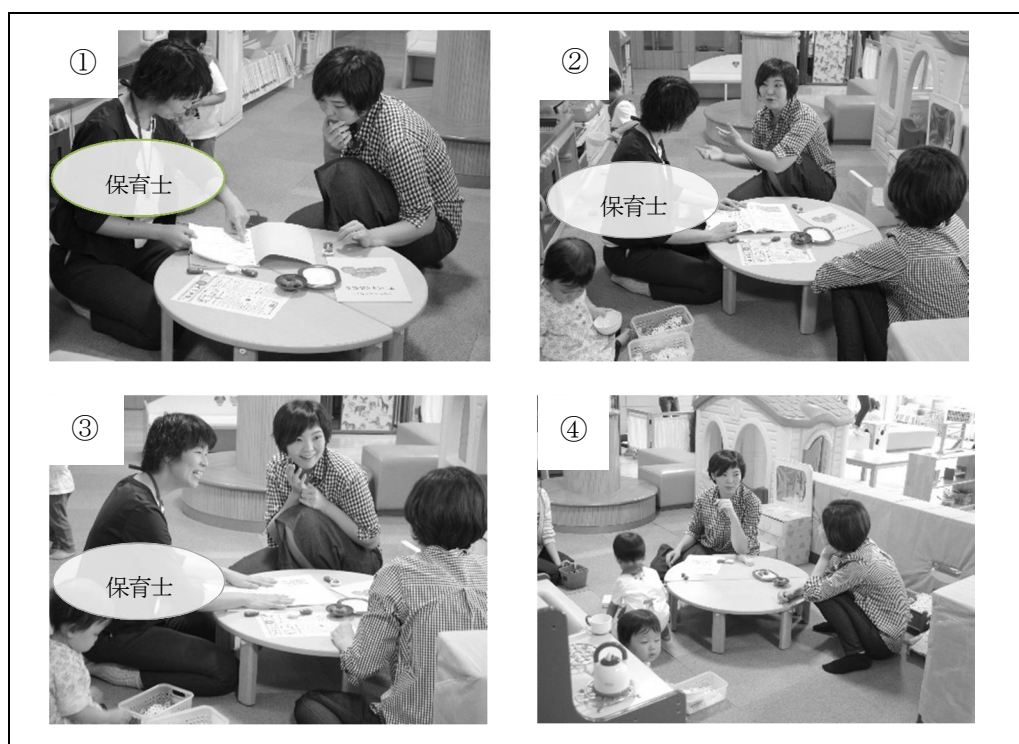


写真2 保育士の支援の一場面 (芽室町子育て支援センター「げんき」)

6. まとめ

フィールドワークの前半、学生たちの関わる対象の中心は、子どもであった。保護者への声かけを試みたいと思いながらも、経験の少なさから、どのように関わって良いか困惑している様子が見られた。訪問を重ねる中で、学生たちは子どもを仲立ちとすることで、保護者とも関係性を作ることが出来ることに気づき始める。また、同じセンターに複数回訪問していることもあり、顔見知りになった保護者から学生に声をかけて頂けることもあった。このように学生の視点が、子どもから保護者に移り、個別の保護者の声、保護者同士の様子、センターの利用の仕方などを俯瞰的に見る事が出来始めると、子育て支援センターの役割や保育者の役割についても思いを巡らせるようになっていた。どの学生の記録を見ても回を重ねるごとに「子ども」から「保護者」、そして「保育者」へと記述内容が厚くなっている。こうした学生の学びは、手遊びやペ

ープサートの披露といったショー的な実践では得られることはできないものである。

また3回という限られた機会であっても、継続的な訪問によって保護者と学生の関係性を築くことが出来たといえる。先に述べた通り、保育所や幼稚園は、保護者支援の大きな役割を担っている。学生も感じているように、実習では経験できない子育て中の保護者と関わる機会は、子育て支援センターに関わらず保育者として現場に出た時に役立つといえる。

汐見(2006)は、子どもと保護者への支援のプロセスとして「環境を設定する」「関係をつくる」「課題を知る」「支援する」「振り返る・学ぶ」の5つを挙げ、保育者養成過程においても学生に必要な視点であることを示唆している。とりわけ短期大学のように2年という養成課程のかなで、実習や就職活動といった過密さの中で取り組むことが出来ることは限られてくるのかもしれない。本報告の中でもゼミという小さな単位での取り組みにもかかわらず、全ての学生が一同にフィールドワークに参加することは出来なかった。しかしながら、子育て支援センターでのフィールドワークを通して学生は、「環境」の大切さを感じはじめ、わずかでであっても親子と「関係をつくる」経験をすることはできたといえる。次年度(2017年度)より本学で実施される「家庭支援実践演習」では、子育て支援センターでの複数回の実践を予定している。振り返りの中から課題を整理して、支援に至るような授業内容を準備していきたいと考える。

謝 辞

本実践のために学生のフィールドワークを快く受け入れて下さった、名寄市地域子育て支援センター「ひまわりらんど」、士別市子育て支援センター「ゆら」、芽室町役場子育て支援センター「げんき」、帯広市地域子育て支援センター「あじさい」の職員の皆さまに感謝いたします。また、不慣れな学生のかかわりを受け入れ、家庭での子育てやセンターでの様子などを話して頂いた各センターに来場していた保護者の皆さま方に感謝いたします。ありがとうございました。

文 献

- 汐見和恵(2006) 保育者の役割と保育者に求められる専門性—今求められている子育て、子育て支援のコンピテンシー—。こども教育研究所紀要2。東京文化短期大学。31-42
- 橘知里・小原敏郎(2014) 保育者の子育て支援力の養成に関する研究—養成段階からの学びの連続性に着目して—。日本家政学会誌65。415-422
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2014) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針<原文>、チャイルド本社
- 福井逸子・小栗正裕・瀧川光治(2008) 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究(1)—短期大学へのアンケート調査の分析を通して—。北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要1。135-150